

# 体育嫌い・運動嫌いに関する基礎的研究

## — 脱ゆとり教育世代の場合 —

Fundamental study of Physical education detesters and Exercise detesters

— In the case of the post generation of pressure free education —

森下 純弘\*

Sumihiro Morishita

脱ゆとり世代といわれる大学生 1,396 名（18～21 歳までの男子 767 名、女 629 名）を対象に体育嫌い・運動嫌いの要因を調査した。

得られた結果より、特徴として運動技術などの差に対して「恥ずかしい」と捉える傾向は特徴的であり、基礎学力テストによって比較・評価されることで「他者評価」を気にする習慣が染みついでしまい、「自信」を失った学生が多く誕生している危険性が高いものと考えられた。

キーワード：体育嫌い、運動嫌い、脱ゆとり教育世代

### I. はじめに

教育という営みが、人格発達・人間形成を目指す以上、身体形成は最も基盤的な営みである。これより、「身体教育（身体を育てる）」は、あらゆる教育実践の中に存在しなければならない。本研究は「同じ経験をして、成長する人とそうでない人がいる」とする現象を「身体教育（身体を育てる）」の側面から追求してみようとする動機がある。

昨今、上記の「身体を育てること」そのものを目的とした唯一の教科である「体育」<sup>1)</sup>や「運動部活動」の存在根拠が問われている<sup>2)</sup>。この背景の一つには、様々な教師の存在がある。例えば

(1)「正課の体育授業の時間には、たかだか生徒の出欠調査をしたり器具の管理しかできない放任型も、課外指導では人間が一変して陣頭指導をする<sup>3)</sup>」体育教師の存在、(2) 社会的人間の育成といった名目の下で、体力・運動能力の向上だけに特化した実践を展開し、子どもの身体を労働力という名の商品の中身をなすモノと捉えてしまっている体育教師の存在、(3) 体育・スポーツの指導において、出来るだけ少ない練習回数で運動特性に触れさせる指導方法、指導技術あるいは指導装置の開発、さらにはカリキュラムや指導理論の作成に力点を置いた実践を展開する体育教師の存在などがある。また、上記(1)～(3)の実態とあわせて、教育のぜい肉と批判されるよ

---

\*流通科学大学非常勤講師、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2022 年 2 月 14 日受理)

©2022 UMDS Research Association

うに、「体育」や「運動部活動」に関わる維持・管理費といった経済的問題が両者の存在に重くのしかかっている。

確かに、(3)の問題については体育授業の時間数削減などにより、一つの教材に時間を多くかけることが難しくなった中で、子どもたちに何とか運動特性に触れさせる方法や技術等を求める教師の行為は自然なことかもしれない。しかし、わずか数時間の単元構成の中で、たとえ倒立前転が全員出来たとしても、その状態は一過性の現象にすぎない場合がしばしばある。また、わずか2時間では、平泳ぎを全員に習得させることが困難であることは容易に理解できる。こうした実践からは、根気強い子ども、粘り強い子ども、何度でも立ち向かってくる子どもは決して生まれてくるものではない。もっと言えば、こうした実践ばかりを経験してきた子どもたちからは、労作を伴う学習や仕事に対する好意性は芽生えず、結果的に「なぜ」「どうして」「何が」などと自ら考えより良い実践を求め、「どうすれば」「何をすれば」などを問い続けその実践をより良い方向へと高めていける態度や行動様式は絶対に生起してこない。

また、(2)についても、多くの研究者や現場の教師が青少年の体力・運動能力の低下問題として取り上げ、その主たる原因を外遊びの減少や塾などの習い事の増加による子どもの活動量や運動量の減少にあると主張してきた。この場合、例えば学校の時間割の中に10分間マラソンを位置付け、毎日10分間を全力で走り続ければ数値は向上するかもしれないが、本当に単なる体力・運動能力が低下しただけと言えるであろうかは疑問である。ところが、教師の中には体育科・保健体育科の目的・目標を「体力向上」「健康教育」と押さえ、体力テストの数値ばかりに目を奪われている方々も存在する。

いずれにしても多くの方々は、これらの体育教師のいずれかと出会い、その存在が強く印象に残っているのではないだろうか。その積み重ねによって、体育嫌い・運動嫌いが多く誕生し、結果的に「体育」や「運動部活動」の不要論へと繋がっている可能性は否定できない。

本稿では、上述の現状が「身体教育（身体を育てる）」の価値を低下させ、あらゆる教育実践の場で文化の伝達と継承に暗い影を落としつつあるという考え方から、以下に示す順番で「体育嫌い」「運動嫌い」の実態を探ってみたいと考えた。

- ① 「身体教育（身体を育てる）」不要論
- ② 「体育嫌い」と「運動嫌い」
- ③ 大学一年生を対象としたアンケート調査分析

## II. 「身体教育（身体を育てる）」不要論

林<sup>4)</sup>は、「斎藤喜博氏の教育の技術は、『教える』技術というよりも、子どもの本来持っている力を引き出す技術で、その仕事の中で、反駁の契機が大きい役割をもっているように思うのです。だから、一つの到達点は、ただちに再びふみ越えられなければならないものです。大事なものは、到

達した地点ではなく、その高みでさえもなく、子どもが一つの峠を越えたというその経験、その事なのではないでしょうか。しかも、教師の十分な力量と方法なしには、子どものこの経験は不可能です」と述べ、斎藤喜博のような姿勢こそ教師として本来あるべき姿であることを主張した。つまり林は、当然、結果も重要ではあるけれど、根気強く粘り抜き、失敗しても何度でも立ち向かうような労作学習の積み重ねによって、子どもの「身体を育てること」が最も重要であると考えたのである。現に彼は学校教育現場に対して「教師が民主主義を浅く形式的に捉えられたことから、子どもたちの自主性を尊重するという名の下に、授業の中での本質的なきびしさが失われている。・・・それでは、卑俗なもの、常識的なものへの批判ができない」と批判していた。

また、不要論の背景には、これまで「体育」や「運動部活動」が「身体を育てること」といった身体形成の意義を十分に検討してこなかったこともある。

Tsujino<sup>5)</sup> は、日本におけるスポーツ教育の歩みを日本スポーツ教育学研究の掲載論文から分析した結果、‘スポーツについての教育’や‘スポーツの中の教育’に研究が集中し、‘スポーツを通しての教育’の研究がきわめて少なかったことを報告した。その上で、この背景にはスポーツ教育における‘身体修練’‘身体形成’の意義の検討が立ち遅れてきたことなどが関係していたことを指摘した。さらに彼は、‘自分なり’に楽しむ体育や‘自分なり’に楽しむスポーツを重視したプレイ論や楽しい体育論の広がりや、一般の方々からスポーツ教育学の人間形成への貢献に関する支持を得難くしてきたことも指摘した。

こうした Tsujino の指摘について、林・梅野<sup>6)</sup> は「学校教育においては、‘through’に関する研究・実践を‘手段論的教育’と捉えるのではなく、むしろ‘through’の問題は、‘教育とスポーツ’‘理論と実践’‘内在的価値と外在的価値’といった従来までの二項対立の図式を総合・統合する‘原(理論)’と解する必要があることが示唆される」と述べ、体育や運動部活動の実践が生涯を考慮した‘身体性’の形成に結節・収斂してくることが望ましいと述べていた。つまり彼らは、子どもたちにとって体育や運動部活動の実践が「この世では、人は誰であっても他の人々を助けることはないし、また助けえないのだから、『方法』によって人々が自らを助けるようにしてやらねばならない<sup>7)</sup>」といった原則の有する問題を解決していく中核的なものにならなければならないことを主張したのである。これは「身体を育てること」が最も重要であるとした先の林の考え方とよく一致する。

ところで、近年の不要論の過熱化に拍車をかけたのは、トップアスリート選手たちの不祥事事件であろう。一般の方々には、トップアスリートとは、根気強く粘り抜き、失敗しても何度でも立ち向かうような労作学習の積み重ねによって、自らの「身体」を育ててきた人物たちであり、優れた身体を形成してきた人間であるものと経験的に捉えられてきた。また、トップアスリートは多くの挫折や焦燥と出会い、乗り越えてきた経験によって、優れた人格発達をしてきたものと捉えられてきた。「尊敬する人物」に関するアンケートをとると、王貞治氏、イチロー氏、長嶋茂雄氏、

室伏広治氏といったトップアスリートたちの名前が上位に入ってくることはよくあることである。アスリートというギリシャ語での意味は、「出来ないことを成し遂げる人」のことを指すことから、トップアスリートのイメージは好意的なものであったと容易に予想できる。ところが近年、労作学習の積み重ねによって人格発達を繰り返し、優れた人格を有した身体を形成してきたであろうトップアスリート選手の不祥事事件が相次いで報道され、「体育」や「運動部活動」のあり方が根底から問われることとなってしまったのである。

このことについて、中森<sup>1)</sup>は「さまざまな運動がよりよくできることは、それとしてすばらしい、しかしそれだけで教育と言えるのか・・・私たちが『からだ育て』にかけるねがいには、将来子どもたちが、どのような職業を選択しようとも、そしてどのような労働を担うことになっても、立派にそれをやり遂げていけるだけのからだの基礎を培っておきたいということがある。様々な問題を改善し、その解決をはかっていくことも、みずからの主体的努力にかかっているといわなければならない」と述べていた。こうした主張は「体育」「運動部活動」では優れた知識や運動技術の習得も重要ではあるが、それ以上に、厳しい社会を自らの力で生き抜くために、何事に対しても主体的に努力できる行動様式の学びこそ重要であることを示唆している。我々のような一般的な人間が優れたトップアスリートたちを尊敬する理由は、彼らが主体的努力によって身につけた行動様式や人格・人間性にあることは否定できない。もっと言えば、すべての専門職において他者より尊敬される人物は、主体的努力によって何らかの優れた行動様式や人格・人間性を有しているはずである。

これらのことから、本研究では「体育＝身体教育（身体を育てる）」に対して好的態度を有した子どもの育成を願って、まずは子どもの「体育嫌い＝身体を育てることを嫌う」「運動嫌い」の原因を、アンケート調査法を用いて基礎的に研究することとした。

### Ⅲ. 「体育嫌い」と「運動嫌い」

「運動嫌い」「体育嫌い」の生成については、単に本人自身に関わる要因のみでなく、広く日本の文化・社会・教育のあり方など関わっている。その要因に関する研究には多くの報告がある<sup>8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17)</sup>。

その中で、佐久本・篠崎<sup>18)</sup>は、小学生から大学生までの子ども 6150 名を対象に、彼らの感想文やレポートより作成したアンケート調査を実施し、そこでの結果を因子分析法を用いて「体育嫌い」の要因を導出した。このとき、彼らは「運動能力テスト」や健康度などについても調査していた。その結果、「技能・適性」をはじめとする 8 つの因子を導出し、「体育嫌い」の要因が多岐にわたっていたことを導出した。また、「体育嫌い」と「運動能力テスト」および健康度との関係を検討した結果、体育好きな子どもはそうでない子どもよりも「運動能力テスト」の得点が有意に高く明確な差異があったこと、さらには体育嫌いな子どもは体育好きな子どもよりも神経症的

傾向の強いことをそれぞれ報告した。このことは「体育嫌い」の子どもが生起する要因は多様に存在するが、最も大きな影響を及ぼしているものが「技能・適性」の問題であることを予想させるものであった。

また、波多野・中村<sup>19)</sup>は大学生613名中24名の「運動嫌い」学生たちを対象に、個別面接法によるインタビュー調査を実施し、「運動嫌い」の子どもの生成機序について検討した。その結果、佐久本・篠崎の結果と同様、運動嫌いの生成原因は一様になく、多岐にわたっていたことを認めている。すなわち、「本人自身」「家庭」「体育授業」「教師」「成績評価」とその原因が多岐にわたっていたことを認めていた。その上で、「運動嫌い」の子どもの生成機序についてモンタージュ法を用いて分析した結果、「運動能力の低位に対する劣等感」が大きな要因として存在し、それが技術指導中心の体育教師の体育授業の中での失敗経験の積み重ねによって増幅していたことを報告した。

他方、「運動嫌い」の子どもの特徴や運動嫌いになった原因を調査した研究も、数多く認められた<sup>10) 13) 14) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28)</sup>。その結果、いずれの研究でも「体育嫌い」と「運動嫌い」とは必ずしも一致しないことが指摘され、「体育好きー運動好きな子ども」「体育嫌いー運動好きな子ども」「体育嫌いー運動嫌いな子ども」の三つに大別できることがわかってきた<sup>注1)</sup>。

これらより、「体育嫌い」「運動嫌い」の子どもが生起してくる大きな原因は、「運動技能」の低さと実践時の失敗経験の積み重ねにあるものと考えられ、両者が生起する場は体育授業の場である可能性の高いものと考えられた。

他方、高田は「体育嫌い」と「運動嫌い」とは別物であると押さえた上で、その主たる原因は教師にあると主張していた。すなわち、彼は『「私は運動好き、でも体育は嫌い」「体育好きだが運動はそれほどでもない」、この種の子どもたちは、実は運動そのものの好き嫌いをいっているのではない。教師の好き嫌いを言っているのである。子どもは、「一緒に運動してくれる元気な先生」「下手な子ほど面倒見てくれる親切な先生」「一人ひとりを記録している専門家の先生」「いつも新しい発見を得させる勉強家の先生」を求めている。さらに、「運動会がなければいい」「体育なんて死ぬほど嫌い」といった現象を、劣等感と呼ぶ人がいる。しかし、単純な技能上の劣等感とは違い、もっと根の深いところから出てくるもののように思われる。少なくとも教師はそう考えた方がいい。というのは、この種の子どもたちは、下手を上手に、負けを勝ちに、させるだけでは駄目で、負けたことからくる下手なことからくる根強い人間不信の感情を取り去ってやらなければいけないからである。集団自体の意識を改善しなければ駄目だということである<sup>29)</sup>。』と述べ、「運動嫌い」「体育嫌い」といった問題を解決・解消するためには、教師のあり方がきわめて重要であることを主張した。高田の主張からは「友達関係」や「運動教材の好き嫌い」ではなく、「教師」の側からいかにして「運動嫌い」「体育嫌い」といった問題を解決・解消していくかを問題にする必要のあるものと考えられる。

このように、「運動嫌い」と「体育嫌い」な子どもは別物であるが、これらの子どもが生起してしまう主たる原因は未だ明確でないことがわかる。

そこで以下では、「運動嫌い」と「体育嫌い」とは異なることを確認しつつ、「運動嫌い」「体育嫌い」の主たる原因をアンケート調査法より探ってみることとした。

#### IV. 大学生へのアンケート調査の方法

アンケート調査の対象は、2016年～2019年の中で大学体育実技を受講した学生1,396名（18～20歳までの男子767名、女子629名）である。

調査の実施は、作成した「体育の『好き嫌い』に関わるアンケート」による調査を実施した。このとき、対象の学生には小学校～現在までの体育授業を振り返り、無記名にて回答してもらった。評定尺度については、織田<sup>30)</sup>の研究結果にもとづいて7段階とするのが妥当であるものと考えられた。しかしながら、体育授業に対する「好き嫌い」をはっきり分けるために「どちらとも言えない」を削除した6段階とした。

「体育嫌い」「運動嫌い」を検討する目的で因子分析法が教育学の分野で用いられるようになってきたのは、おおむね1970年頃からであった。これより、1970年から現在（2011年）にかけて発表された学会誌全国版の教育雑誌、および大学紀要の中で「体育嫌い」の要因に関する因子分析的研究を収集し、それらの論文で採択されている質問項目を素データにアンケート調査を作成した。ちなみに、ここで対象とした学会誌および全国版の教育雑誌は、『生活科学』『体育の科学』『学校体育』『体育科教育』『日本体育学会大会号』の計5種と各種大学紀要等であった。

アンケート調査票は、以下の手順で作成した。

まず、収集した質問項目の中から各論文の研究結果において0.400以上の因子負荷量を有する項目を仮項目として機械的に抽出した。その結果、計92項目を取り出した。その後、質問内容のまったく同じ項目、表現は違うが質問内容は同じ（例：「先生が頑張っても励ましてくれなかった（採択）」と「先生が励ましの声をかけてくれなかった（削除）」）と判断した項目を削除することで計83項目を採択した。続いて、上記83項目の質問項目の内容から、以下に示す予備的カテゴリーを設定した。このとき、上述した論文において抽出した項目が属する因子名を参考に、予備的カテゴリーを設定した。その結果、①「技能・適性要因（例：上手くできない運動が多い）」が計10項目、②「身体・生理的要因（例：もともと体が病弱）」が計7項目、③「体育授業での経験要因（例：体育授業の中で人から文句を言われた経験がある）」が計12項目、④「態度・性格要因（例：失敗をくよくよ考えるたち）」が計10項目、⑤「家庭・環境要因（例：小さいころから体育の環境に恵まれていなかった）」が計3項目、⑥「教師要因（例：先生が真剣に指導してくれなかった）」が計42項目の計6個の予備的カテゴリーとなった。

ここから、81項目をそのまま採用することには齟齬が認められた。すなわち、予備的カテゴリー

の質問項目数をみても、7~42項目と項目数の格差がきわめて大きい状態にあった。そこで、質問項目の中から0.500以上の因子負荷量を有する項目を予備的カテゴリーの代表項目として採択することで、予備的カテゴリーにおける項目数の格差を小さくした。その結果、各カテゴリーの質問項目数は7~20項目となり、計41項目を採択した。このとき、⑤は全質問数が3項目であったため、因子負荷量が0.500未満の項目であってもすべて採択した。

表1は、整理した「体育嫌い」「運動嫌い」の原因に関するアンケート調査の項目を示している。これを用いて、大学生の「体育嫌い」「運動嫌い」の程度とその理由を調査した。

表1. 予備的調査票 (41項目)

1. 運動神経が鈍いと思うため	24. 仲間同士で教え合う機会がないため
2. 上手く出来ない運動が多いため	25. 出来ないまま授業が進んでいくため
3. 他の人より体力面と技術面で劣っているため	26. 人前で悪い見本にさせられた経験があるため
4. もともと病弱なところがあるため	27. 自分の能力以上のことをさせられるため
5. 運動するとすぐに疲れるため	28. 出来る人と出来ない人で同じことを教えるため
6. なんとなく嫌い	29. 出来ない人は駄目扱いされたため
7. 人前で運動することが恥ずかしいため	30. 先生が親しみにくい、厳しい、威張る、すぐに怒る、面白くない等の理由で嫌いだったため
8. 運動しても自分のためにならない	31. 授業の雰囲気常在暗かったため
9. 体育授業は面倒くさいため	32. 自分の幼少時に遊ぶ経験や運動をする環境がほとんどなかったため
10. 汗をかくのが嫌いなため	33. 失敗して恥をかくのが不安なため
11. 人から笑われた経験があるため	34. 運動に対して恐怖心があるため
12. 他の人から文句を言われた経験があるため	35. 基礎的な運動ばかりで、ゲームが少なかったため
13. ルールや規律が厳しいため	36. 先生に気にしているところや欠点ばかりを取り上げられたため
14. タイムや記録をとって人と比較されるのが嫌い	37. 技能重視や相性重視(好き嫌い)での評価だったため
15. 先生が頑張っても励ましてくれなかった	38. 一つの種目が駄目だと他の種目が良くても評価が悪かったため
16. 先生が真剣に指導していなかった	39. 先生が努力や伸びを評価時の考慮に入れてくれなかったため
17. 先生が運動が上手な人を中心に教えるため	40. 家族がスポーツに無関心だったため
18. 努力しているのにみんなが認めてくれないため	41. 家族と一緒に運動あそびをした記憶がないぐらい、運動する機会が少なかったため
19. 先生が「なぜ出来ないのか」の理由を解りやすく教えてくれないため	
20. 体育は、先生に言われた通りに動くだけで、自分たちが工夫して運動する機会がないため	
21. グループ行動や集団行動がいやだった	
22. みんなと仲良く出来なかったため	
23. 競争が嫌いなため	

## V. 「体育嫌い」と「運動嫌い」は別物

図1は、実施した調査の結果を示したものである。

まず、体育に対して好意的反応を示した者は、全体の2割程度に留まり、8割近くの大学生が体育に対して非好意的であった。一方、運動に対しての反応は相反し、好意的反応を示した者は全体の9割近くも存在した。

表2は、体育・運動の「好意的-非好意的」反応をクロス集計で示したものである。体育好きな学生の9割以上は、運動に対しても好意的な反応にあった。一方、体育嫌いな学生の中の8割近くの者が、運動に対して好意的な反応を示すという結果にあった。

これらの結果は、「体育嫌い」と「運動嫌い」とは別物であるというこれまでの先行研究の結果を支持するものであった。特に、運動に対しての「好意的-非好意的」な反応の割合は、どのような内容でもある程度見られるものであり、大きな問題ではないといえる。つまり、多くの大学生を始めとする人々が運動すること自体は好意的に感じている可能性の高いものと予想できる。

一方、体育に対しては、問題がないとは言い切れない現実にあった。小学生期には最も好きな教科の一つとして挙げられる体育が、大学生期になると8割近くの者が嫌う非好意的な反応を示す教科へと落ちている現実には、深刻な問題であると言わざるを得ない。

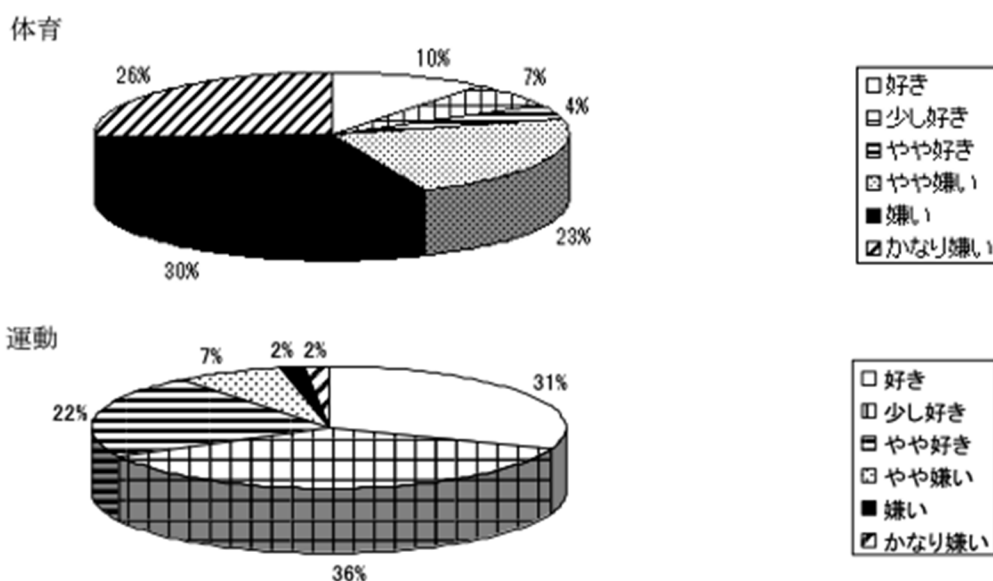


図1. 大学生の体育および運動に対する「好意的-非好意的」反応

表2. 大学生の体育・運動に対する「好意的-非好意的」反応のクロス集計

大学生 (n=1396)	運動好き	運動嫌い
体育好き	364 人	41 人
体育嫌い	673 人	318 人

## VI. 体育嫌いが生起する原因について

表3は、体育嫌いになった原因を探るために、体育に対して非好意的な反応を示した大学生991名がその理由として回答した結果の例である。理由については、一つに限定せず該当するものすべてを選択してもらった結果、6864個の回答を得た（一人あたり平均6.9個）。

表4は、回答の多かった上位10個の項目を示している。上位10項目中8項目は、いずれも運



動技能面に対する劣等意識に関わった項目であることがわかった。また、「着替えとか面倒くさくてなんとなく嫌い」の項目は体育に対する無気力さに関わった項目であった。加えて、上記の項目を選択した学生は、「他の人より体力面と技術面で劣っているため」をはじめとした他の8項目のいずれかも合わせて選択していた。このことは、劣等意識はあるがそれを乗り越えるための気力までは薄い学生がほとんどであったことを窺わせるものであった。つまり、体育嫌いの学生の大半は、体育の中に「身体教育(身体を育てる)」の価値の存在を有していないものと推定できた。

それでは、なぜ体育嫌いになった大学生は、体育の中に「身体教育(身体を育てる)」の価値の存在を有することが出来なかったのだろうか。上記の問いを解決するために、今回の調査対象とした大学生1396名に「なぜ、体育嫌いの運動好きな人が出来ると思いますか?」という自由記述形式での質問を実施した。

その結果、次の6つの回答が大半の学生が記述していた内容として得られた。すなわち、「体育授業は最も嫌いな教材だが、無理やりする必要があるので選択制にしてほしい」「例えば運動部活動など運動は自分が本当に好きなスポーツが出来るし、また同じ気持ちの人間が集まっているが体育授業は違うから」「体育ではやりたい種目ができないから」「体育は、運動能力に差があっても上手でも下手でも両方とも恥ずかしい。一方、運動部だとある程度同じレベルの人達と一緒に活動出来るから楽しい」「体育は息抜き程度で役に立たないけど、運動部活は精神的にも強くなれるし役に立つ」「嫌いな人などと同じグループに無理やりさせられる体育授業は嫌いになりやすい」である。こうした記述からだけでも、多くの大学生が体育の中に「身体教育(身体を育てる)」の価値を有していないことがわかる。それどころか、大半の大学生は、体育は嫌いな教材を無理やりさせる教科や嫌いな人と同じ活動をさせる教科といった捉え方をしていることがわかった。

以上のことを踏まえたとき、脱ゆとり教育を受けてきた大学生たちの中には、体育授業の「楽しさ」が歪んで形成されているものと考えられ、これが体育嫌いの真の原因を生起しているように予想できた。

もっと言えば、「体育=身体教育(身体を育てる)」に対する愛好的態度をほとんど有し得ておらず、子どもの身体形成が歪んでいるものといえる。

それ故、体育嫌いな学生ほど、根気強く粘り抜き失敗しても何度でも立ち向かうような労作学習は好まず、これらを求められた過去の経験に対して体育嫌いであると回答していたのかもしれない。

とりわけ、脱ゆとり教育世代の特徴として、運動技術などの差に対して‘恥ずかしい’と捉える傾向は特徴的であるものと考えられた。つまり、成功して目立つこと、失敗して目立つことを恥ずかしいと捉える傾向にある。脱ゆとり教育の時代に登場したアニメ『彼方のアストラ』に登場するユンファ氏の「目立ちたくない、透明になりたい」という有名なセリフをまさに表現した世代であるものと考えられた。上記の傾向の背景には、自己評価や自尊感情の低さがあり、基礎

学力テストによって比較・評価されることで「他者評価」を気にする習慣が染みついてしまった危険性があるものと考えられた。

その結果、例えば体育科に対しては「自信」を失った大学生が多く誕生してしまったものと推定できた。

表 3. 体育嫌いと回答した学生のその理由（例）

(1) 小学校から現在までを振り返って、あなたは体育授業好きまたは好きだったと思いますか？					
6	5	4	3	②	1
強く あてはまる	少し あてはまる	あてはまる	ほとんど あてはまらない	あてはまらない	全く あてはまらない
(2) あなたが体育授業を嫌いになった理由だと思うものをすべて選び、番号に○をしてください。 (○事項のみ抽出)					
1. 運動神経が鈍いと思うため					
2. 上手く出来ない運動が多いため					
3. 他の人よりも体方面と技術面で劣っているため					
5. 運動するとすぐに疲れるため					
7. 人前で運動することが恥ずかしいため					
14. 汗をかくのが嫌いなため					
11. 人から笑われた経験があるため					
12. 他の人から文句を言われた経験があるため					
14. タイムや記録をとって人と比較されるのが嫌い					
23. 競争が嫌いなため					
25. 出来ないまま授業が進んでいくため					
32. 自分の幼少期に遊ぶ経験や運動をする環境がほとんどなかったため					
33. 失敗して恥をかくのが不安なため					

表 4. 体育嫌いの理由（上位 10 項目）

1 位	他の人より体力面と技術面で劣っているため（624 票）
2 位	上手くできない運動が多いため（511 票）
3 位	失敗したら恥ずかしく不安なため（453 票）
4 位	どうせ運動の上手な人が評価されるため（368 票）
5 位	タイムや記録をとって人と比較されるのが嫌い（397 票）
6 位	着替えとか面倒くさくてなんとなく嫌い（376 票）
7 位	技能重視や相性重視（好き嫌い）での評価だったため（359 票）
8 位	自分の能力以上のことをさせられるため（312 票）
9 位	苦手な種目があるため（231 票）
10 位	運動するとすぐに疲れるため（129 票）

## VII. まとめと今後の課題

「体育（身体教育）」は、あらゆる実践に生きて働く「実践知」として機能してこそ、その存在根拠が納得されるものである。ボルノー<sup>31)</sup>はいう。「経験の意味している事は、思っていたように物事が進まないこと、特に人間は期待していたようには善意を持っていないこと、大まかに言えば、世界は悪であること、である。経験はそれゆえに、人間の理想的な飛躍を妨げ、人を疲れさせるものである。経験の結論には諦めがある。人が世の中で何かをよりよくしようという、すべての試みが挫折するのを繰り返し知った後では、人は結局はその試みを放棄し、ありふれた、

日課通りの間違いのない行動ばかりするようになる。・・・それゆえ、人は新しいものやよりよいものをうみだそうとすれば、たえず奮起して経験の圧力と戦わねばならない。・・・経験はまたあらゆる計画や予測を許さない。それは何か宿命的なものであり、人のあらゆる意図に反して、人間に対立するものである。人が‘経験’したと言うなら、それを苦しみながら耐え抜いたはずである。」

このようにボルノーは「経験」を「人間の努力に対立するもの」と考え、真の楽しさとは苦しみのことであり、経験とは苦しみの乗り越えであると解する。そして、苦しみの乗り越えには「努力」が必要であると捉えているのである。さらに、「努力」する行動の背景には、「新しいものやよりよいものを生み出そうとする」気持ちが重要であると捉え、努力という行動が目的・目標が明確に存在し、そこに向かおうとするところに生まれてくるものであると考えていると読み取れる。このように考えたとき、今日の体育嫌いが数多く生じつつある現実、大学生たちが過去の体育授業の中で明確な目的・目標を有さず、受け身的な学びの場に心身共に浸かってきたことを想像させるものである。もっと言えば、単なる欲求充足としての楽しい体育授業ではなく、仲

間と共に「つまらないものを面白いものに」「楽しくない状態を楽しい状態へ」と「場」を変容させる努力の過程あるいは結果としての楽しさをほとんど経験してこなかった大学生ばかりが育成されてきたのである。

今後、この課題を解決していくためには、多種多様なことを乗り越えていかなければならない。とりわけ、教育実習生や初任教師たちには、「体育が何を教える教科なのか」を明確に有した上で授業実践を積み上げて行ってほしい。その手掛かりとして、梅野<sup>32)</sup>は、多様な運動教材の経験を通して、「各種スポーツにおける技能特性を追求していく身体」と「運動・スポーツ実践での多様な感じをしっかりと発言する身体」の育成を企図した実践の積み重ねの重要性を主張していた。今回、こうした身体論的立場から論及することは出来なかった。今後、さらなる研鑽に励み、哲学的―解釈学的手法より体育の存在理由について整理していきたいと考えている。また、今回は「体育嫌い―運動嫌い」に関わった文献学的検討についても十分には行えていない。

#### 脚注

注 1) 「運動嫌い」「体育嫌い」の概念規定は難しく、過去の研究報告においても用語の使用は一様ではない。しかし、「運動好きの体育嫌い」<sup>33)</sup>の存在も指摘されていることから、本研究の範囲内で用語を限定することは必要であろうと思われる。そこで本研究では、加賀・石川<sup>34)</sup>の定義を用い、「運動嫌い」とは、「みずからスポーツ活動や身体運動を行うことに対して否定的態度を取るもの」とし、「体育嫌い」とは、「授業の雰囲気、運動種目、施設用具、授業内容、教師の指導法、評価のしかたなど、体育授業の経験の中で発生したもの」とし区別する。

#### 参考文献

- 1) 中森孜郎. 教育としての体育. 大修館書店: 東京. 1996.
- 2) 日本体育学会学校体育問題検討特別委員会監訳. 世界学校体育サミット. 杏林書院: 東京. 2002.
- 3) 佐々木久吉. 改訂小学校学習指導要領の問題点. 体育の科学. 1954, 4(2):55-60.
- 4) 林竹二. 授業―人間について―. 国土社: 東京. 1973.
- 5) Tsujino Akira. "A view of Japanese society of sport education in the upcoming 21 th century," *proceedings of the international conference for the 20th anniversary of the Japanese society of sport education*, 1(2000)1-8.
- 6) 林修・梅野圭史. 身体教育における人格発達に関する一考察―エリクソンの自我発達論の体育実践への読み替え―. 体育・スポーツ哲学研究. 2005, 27(1):17-33.
- 7) ベスタロッチ, J. H. 長尾十三二・福田弘訳. ゲルトルート児童教育法. 明治図書: 東京. 1976:77.
- 8) 鈴木清. 運動嫌いの子どもの背景. 体育科教育. 1974, 22(4):6-8.
- 9) 高木修. 社会的行動に及ぼす態度の効果. 関西大学社会学部紀要. 創立九十周年記念特輯. 1975,243-67.
- 10) 高橋英一・池上金治・島田正士・砂田孝士・高田栄三・宮田和久・横瀬竜一・高橋重清. 運動嫌いの体力について. 日本体育学会大会 26 号. 1975:507.

- 11) 佐久本稔. 運動の好きな子嫌いな子. 学校体育. 1976, 29(6):31-38.
- 12) 戸村博之. 児童の運動能力と心理的特性に関する研究. 体育学研究. 1978, 23(2): 173-281.
- 13) 岡沢祥訓. Eysenckの向性と運動嫌いの関係. 日本体育学会大会 31号. 1980: 260.
- 14) 佐藤正. 体育における臨床的指導法の研究(1) -運動嫌いの問題と指導-. 東京女子体育大学紀要. 1980, 3: 9-15.
- 15) 浜田靖一. 体育・スポーツ嫌いを考える. 新体育. 1980, 150(4): 8-13.
- 16) 兵頭寛・河野昭. 体育嫌いを生起させる要因の研究-体育授業における教師行動について-. 愛媛大学教育学部紀要, 教育科学. 1992, 138(2): 163-174.
- 17) 水野裕美. 小学生における体育の好き嫌いに関する研究. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集. 1999, 2: 81-88.
- 18) 佐久本稔・篠崎俊子. (1979) 学校体育期の“運動嫌い”に関する研究 (I). 生活科学. 12(1): 55-78.
- 19) 波多野義郎・中村精男. 「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究. 体育学研究. 1981, 126(3): 177-187.
- 20) 小林篤. 子どものつまずきと運動嫌いをめぐる諸問題. 体育科教育. 1970, 28(10): 6-8.
- 21) 佐久本稔. 運動ぎらいにさせるものはなにか-その正体と交路を求めて-. 体育の科学. 1970, 20(5): 283-288.
- 22) 石橋保・佐久本稔. 「運動ぎらい」に関する研究-生徒と体育教師間の Dis Communication について (1). 福岡教育大学紀要第5分冊芸術・保健体育・家政・技術科編. 1971, 21: 61-66.
- 23) 鈴木喜美子. 導入の工夫により恐怖心の除去. 学校体育. 1978, 131(1).
- 24) 末利博. 運動の下手な子の原因の探究とその対策. 学校体育. 1978, 31(1).
- 25) 調枝孝司. 体育嫌いの原因の探究とその対策. 学校体育. 1978, 131(11): 12-17.
- 26) 仲田千恵子・頭川徹治・横山泰行. 運動嫌いの子どもたちの特徴は何か. 新体育. 1978, 48 (2): 74-75.
- 27) 浅田隆夫. 運動嫌いを形成するもの-学習のつまずきとの関連で-. 体育科教育. 1980, 28(10): 12-15.
- 28) 荒井迦夫・周東和好. 運動嫌いに関する一考察. 淑徳短期大学研究紀要. 2003, 42: 17-31.
- 29) 高田典衛. 児童体育入門, 明治図書, 東京. 1976.
- 30) 織田揮準. 日本語の程度量表現用語に関する研究. 教育心理学研究. 1970, 18: 166-170
- 31) ボルノー, O.H.: 浜田正秀 (訳). 人間学的に見た教育学. 玉川大学出版部: 東京. 1983.
- 32) 梅野圭史. 「生きる力」と体育授業-体育科教育学私論-. 体育思想研究. 1999, 4: 71-91.
- 33) 宇土正彦. 国民スポーツの普及・振興と学校体育の役割. 体育科教育. 1976, 24(13): 30-32.
- 34) 加賀はづき・石川且. 「運動嫌い」・「体育嫌い」について-教師と生徒の相互認識差に着目して-. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文(7). 2006.